

米大統領選「サンダース現象」に代表される格差センシティブな心の神経基盤

1. 発表者： 亀田達也（東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻 教授）

2. 発表のポイント：

- ◆さまざまなイデオロギーの違いを超え、「格差や最も恵まれない状態に、好むと好まざるとに関わらず自然に反応してしまう共通の神経回路」の存在を、脳イメージング(fMRI)を含む認知神経科学実験により明らかにした。
- ◆20世紀の社会哲学を席卷したジョン・ロールズの『正義論』の「いかに分けるべきか」に関する議論が「机上の空論」ではなく、ふつうの人々の脳に神経回路として実際に存在することを明らかにした。
- ◆富の格差をめぐる人々の懸念は巨大なうねりを生み出している。イデオロギーを超え最不遇状態に敏感に反応する神経基盤の存在は、「分配のあり方」に関する対立を越える科学的基礎となる。

3. 発表概要：

東京大学人文社会系研究科の亀田達也教授らの研究グループは、「いかに分けるべきか」についてのさまざまな理想や考え方（イデオロギー）の違いを超えて、人の脳に、「格差や最不遇の状態に自発的に反応してしまう共通の神経回路」が存在することを、脳イメージング(fMRI)などを用いて明らかにした。「正しい分け方とはどのような分け方か」をめぐるこれまでの議論は、『正義論』を著したジョン・ロールズなど、哲学者によって長い間リードされてきた。今回の研究は、こうした哲学的な議論が抽象的な「机上の空論」に留まらず、実際に分配場面に臨んだときに、哲学者ではない「ふつうの人々」が共通に示す思考過程と密接に関係すること（哲学の専門的な議論とふつうの人々の実際の思考過程が重なること）を、認知神経科学実験により世界で初めて明らかにしたものである。「ウォール街を占拠せよ」運動や最近の米大統領選「サンダース現象」に見られるように、富の格差や不遇な状態をめぐる人々の懸念は、世界各地で巨大な社会的うねりを生み出している。「最も恵まれない状態」に自然に反応してしまう、イデオロギーを超えた共通の神経基盤の存在は、「分配のあり方」に関する人々の対立や争いを乗り越えていくための科学的な基礎を与える。

4. 発表内容：

①研究の背景

「いかに分けるか」をめぐる問題は「分配の正義」と呼ばれ、洋の東西を問わず社会生活の根幹をなしている。分配の正義については、これまで法哲学や政治哲学、倫理学を中心に「あるべき分配のかたち」が論じられてきた。しかしその一方、正義や規範をめぐる「～べき」の議論が、人々の素朴な認知・行動（～である、～する）とどの程度一致するののかについては、まだほとんど分かっていない。本研究では、「～べき」に関する規範的な議論と、人々の実際の行動（～である）との関係を検討するため、20世紀の社会哲学を席卷した哲学者ジョン・ロールズの議論がどのような経験的基礎を持ち得るのかについて、行動経済学と認知神経科学の手法を組み合わせることで検討した。

②研究内容

ジョン・ロールズが1971年に公刊した『正義論』(A theory of justice)は、20世紀の「規範的な正義論」の中で最も重要な著作の1つと言われている。よく知られているように、ロールズは「正しい分配のあり方」を考えるために、「無知のヴェール」なる架空の仕掛けを用いた、哲学的な思考実験を行った。無知のヴェールとは、中立で公正な判断を行うために、ロールズの考えた「概念的な仕掛け」であり、このヴェールをかぶると、自分に関するあらゆる事実(人種・階層・財産・能力・年齢・性別などを含む一切の個人的な属性)を知ることができなくなる。社会における自分の立ち位置がまったく分からない以上、自分にとって有利な分配のかたちを追求することは不可能になる(たとえば、自分の「地位」、「財産」、「能力」が全くわからない以上、所得の大きい者ほど税率が大きい「累進課税」を是とするか否とするかについても、自分にとっての有利さをもとに考えることはできない)。ロールズは、こうした中立の状態のもと、最も恵まれない立場(ミニマムの立場)に置かれた人々の福利を最大化(マキシマイズ)する「マキシミン原理」が、正しい分配の原理として全員一致で採択されると考えた。

このように、ロールズは、「無知のヴェール」という人工的な仕掛けを使うことで、分配の正義の問題を、「不確実性のもとでどのように意思決定を行うのか」という問題の枠組みに変換した。しかし、「無知のヴェール」は極めて人工的であり、哲学者ではない「ふつうの人々」が実際の分配判断を行う際の論拠となるとは考えにくい。一方で、「社会的な分配」と「不確実性に対処する」という2つの課題は、たとえ「無知のヴェール」がなくても、ヒトの進化史を通じて(狩猟採集社会から近代社会に至るまで)、そもそも近い関係にあると考えられる。本研究では、この観点から、「ふつうの人々が社会的分配を行うときと、リスクのもとでの意思決定(ギャンブルなど)を行うときの双方で、最も恵まれない状態・最も悲惨な結果に対して、注意の自動的な焦点化が起きる」という仮説を検討した。視線のパターンなど注意プロセスに関する検討、および、課題を遂行中の脳活動の計測から、この仮説は明確に支持された。一連の認知神経科学実験を通じて、ふつうの人々は、ロールズの議論を一切知らなくても、自発的に、最も恵まれない状態に最大の注意を払い、そうした注意プロセスの背景には、「共感」や「視点取得」(相手の立場になってみること)を担う「右側頭頭頂接合部」(Right temporo-parietal junction: RTPJ)と呼ばれる脳部位が深く関わっていることが明らかになった。さらにそうした認知・脳活動は、望ましい分け方に関する人々の個人的なイデオロギーや意見の違いを超えて、共通に(普遍的に)見られることが明らかになった。

③ 社会的意義

本研究は、ロールズ的な思考が、私たちの心に、イデオロギーの違いを超えて、自然かつ頑健な形で備わっていることを示している。「ウォール街を占拠せよ」運動や米大統領選「サンダース現象」に見られるように、富の格差や不遇な状態をめぐる人々の懸念は、今日、世界各地で巨大な社会的うねりを生み出している。本研究で明らかにされた「最も恵まれない立場への自然な関心」という共通の認知・神経基盤の存在は、分配のあり方に関する社会的な合意を探る上で、重要な基礎となる。また、人文系の問いを自然科学の手法で解くという本研究のアプローチは、文理融合のクリアな例として、重要な学問的意義をもつ。

5. 発表雑誌:

雑誌名: Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America
「米国科学アカデミー紀要」

論文タイトル : Rawlsian maximin rule operates as a common cognitive anchor in distributive justice and risky decisions.

著者 :

Kameda, T.*, Inukai, K., Higuchi, S., Ogawa, A., Kim, H., Matsuda, T., & Sakagami, M.

(*Corresponding author)